

# 大都市居住高齢者の社会活動に関連する要因

## 身体, 心理, 社会・環境的要因から

オカモト ヒデアキ オカダ シンイチ シラサワ マサカズ  
岡本 秀明\* 岡田 進一<sup>2\*</sup> 白澤 政和<sup>2\*</sup>

**目的** 大都市に居住する高齢者の社会活動に関連する要因を, 身体, 心理, 社会・環境的な状況から総合的に検討することを目的とした。

**方法** 大阪市に居住する65~84歳の高齢者1,500人を, 選挙人名簿を用いて無作為に抽出した。調査は, 自記式調査票を用いた郵送調査を実施した。有効回答数771人(51.4%)のうち, 代理回答およびIADL得点が0点の者を除外したため, 分析対象者は654人となった。社会活動は, 個人活動, 社会参加・奉仕活動, 学習活動, 仕事という4側面を捉える社会活動指標を用いて測定した。分析は, 社会活動の4側面それぞれを従属変数, 基本属性, 身体, 心理, 社会・環境的な変数を独立変数としたロジスティック回帰分析を行った。

**結果** ロジスティック回帰分析を行った結果, 個人活動が活発な者の特性は, 外出時のからだのつらさがない, 親しい友人や仲間の数が多い, 活動情報をよく知っている, 活動情報を教えてくれる人がいる者であった。社会参加・奉仕活動では, 地域社会への態度の得点が高い, 平穏でのんびり志向の得点が高い, 親しい友人や仲間の数が多い, 外出や活動参加への誘いがある, 技術・知識・資格がある, 中年期に地域とのかかわりがあった者であった。学習活動では, 地域社会への態度の得点が高い, 外出や活動参加への誘いがある, 活動情報をよく知っている者であった。仕事では, 変化や新しさを伴う活動的志向の得点が高い, 技術・知識・資格がある, 中年期に地域とのかかわりがあった者であった。

**結論** 高齢者の社会活動には, 身体, 心理, 社会・環境的な要因が幅広く関連していた。高齢者が社会活動に参加しやすい社会を構築していくためには, 地域における仲間づくりや共通の関心を持つ者同士が出会ったり共に活動したりしやすいような支援や, 地域の委員等が活動参加を適度に促すことなどが求められる。また, 個人の側も高齢期以前から地域の活動に関心を持つなどの努力が必要であろう。

**Key words** : 地域高齢者, 大都市, 社会活動, 社会参加, 横断研究

## 1 はじめに

高齢者数が急速に増大し, それにともない介護を必要としない高齢者数も増加しているわが国では, 高齢者の社会活動の促進や活動に参加しやすい環境整備に関する様々な政策が展開されている。高齢者の社会活動は, 健康, 生きがい形成や幸福な老いに寄与するとされ<sup>1~4)</sup>, 健やかで充実した高齢期を送ることが可能な社会を構築して

いくうえで着目すべきものとなっている。地域社会にとっても, 知識や経験が豊富な高齢者が社会活動を行うことにより, 多くの恩恵を得ることができる<sup>5,6)</sup>。

高齢者の社会活動の関連要因は, 年齢, 性別, 家族形態, 健康度自己評価, 活動能力, ソーシャル・ネットワーク, 活用できる技術や知識等が報告されている<sup>7~10)</sup>。しかし, 研究により社会活動の概念定義が異なっているために, 研究結果の比較検討をしにくいことが課題であった。これについては, 橋本らが高齢者の社会活動を4側面で捉えた「社会活動指標」を開発したことにより<sup>11)</sup>, 比較検討しやすくなった。

\* 和洋女子大学家政学部

<sup>2\*</sup> 大阪市立大学大学院生活科学研究科  
連絡先: 〒272-8533 千葉県市川市国府台 2-3-1  
和洋女子大学家政学部 岡本秀明

この指標を用いた研究について、佐藤らは、青森県の高齢者を対象とし、社会活動と年齢や性別との2変数間の分析をした結果、これらが関連する傾向がみられたとしている<sup>12)</sup>。その後、佐藤らは同じ対象で多変量解析を用いた研究も行い、配偶者の有無、家族形態、健康度自己評価、体力自己評価も社会活動に関連していたとしている<sup>13)</sup>。金らは、埼玉県鳩山町の55歳以上の中高年を対象とし、多変量解析を行った結果、年齢、性別、健康度自己評価、学歴、地域社会への態度等が社会活動を構成する複数の活動側面に関連していたことを報告している<sup>14)</sup>。

以上のような先行研究を検討した結果、わが国では、第1に、大都市の高齢者を対象とした研究が少ないことがあげられる。大都市は、農山村部と比較して、交通網が発達していること、社会活動に関する資源が地域に豊富にあること、会社に勤務していた高齢者が多く、退職する前に地域とのかかわりが非常に少なかったために退職後に地域における社会活動へ移行しにくい者が多いといった特徴がある。大都市の人口高齢化も進行しており、このような地域を対象とした研究が必要である。第2に、身体、心理、社会・環境的な状況を包括的に含んだ視点から社会活動の関連要因を多角的に検討した研究は極めて少ないことがあげられる。望ましい支援方法を検討する際には、高齢者の生活全体を捉えようとした視点から、社会活動の関連要因を明らかにする研究が必要である。

そこで本研究では、大都市居住高齢者の社会活動の関連要因を、身体、心理、社会・環境的な状況から総合的に検討することを目的とした。

## II 研究方法

### 1. 調査対象と方法

大阪市選挙人名簿を用いて無作為抽出した、大阪市に居住する65～84歳（2005年4月1日現在）の高齢者1,500人を対象に、自記式調査票を用いた郵送調査を実施した。調査対象者の年齢は、高くなると要介護状態の発生率が高くなり社会活動性が低下することを考慮し、前期高齢者10歳分（65～74歳）と後期高齢者10歳分（75～84歳）とした。標本抽出の手順は、大阪市の24区のうち8区を無作為に抽出し、この8区それぞれの65～84歳の人口割合を反映して合計1,500人となるよう

に無作為抽出した。調査期間は、2005年4月1日から5月10日までで、有効回答数は771人（51.4%）であった。

なお、調査の際は、調査対象者に対し、協力依頼文書にて協力ができない場合は回答せずによること、回答されたデータは統計的に処理し、個人を特定することはないことを示した。協力が得られる場合は、調査票を無記名の状態で同封した返信用封筒により返送するよう依頼した。以上の理由により、本研究における倫理的な問題点はないと判断した。

### 2. 調査項目および変数

#### 1) 従属変数

社会活動は、橋本らの「社会活動指標」<sup>11)</sup>を若干変更したものを用いた。この指標は、高齢者の社会活動を「家庭外での対人活動」と規定し、個人活動（10項目）、社会参加・奉仕活動（6項目）、学習活動（4項目）、仕事（1項目）の4側面で捉えたもので、妥当性、再現性、感度がある程度有し、尾島ら<sup>15)</sup>により実用化されている。変更したのは個人活動の構成項目で、第1に、金らの研究<sup>14)</sup>とほぼ同様に、「お寺参り」を「友人や知人と食事（町のふれあい喫茶や食事会等も含む）」に変更した。独居や夫婦のみ世帯が増加している今日、家族以外の者との会食が個人活動として重要なこと<sup>14)</sup>、調査対象地域ではふれあい型食事サービス等が実施されていたためであった。第2に、「レクリエーション」という用語は回答者が理解しにくい場合を考え、「個人的な娯楽や遊び」に変更した。回答選択肢は、活動状況の詳細把握や回答のしやすさを考慮し、「週に3回以上」、「週に1～2回程度」、「月に1～2回程度」、「半年に2～3回程度」、「年に1～2回程度」、「まったくしていない」の6択で尋ねた。

社会活動の4側面の活動得点の算出は、社会活動指標が示す方法にしたがって該当項目数を活動得点とした<sup>11)</sup>。具体的には、各項目について、「週に3回以上」～「年に1～2回程度」の回答に1点、「まったくしていない」に0点を付与して単純加算した。これにより、社会活動指標の方法と同様に、個人活動が0～10点、社会参加・奉仕活動が0～6点、学習活動が0～4点、仕事が0～1点の値をとることとなった。

## 2) 独立変数

調査では、年齢、性別、家族形態、配偶者の有無、学歴、暮らし向き、居住年数という基本属性に加えて、先行研究（国が実施した調査を含む）を参考に7~10,12~14,16~19<sup>1)</sup>、社会活動との関連が予想される要因（以下、関連が予想される要因とする）として、身体的状況、心理的状況、社会・環境的状況に関する変数を設定した。

### (1) 身体的状況に関する変数

IADL、外出時のからだのつらさの2変数を設定した。IADLは、身体的な自立の程度を示すADLよりも高次の生活機能を示す指標であり、身体的なもの以外の能力も含まれた概念である<sup>20)</sup>。しかし、地域における社会活動の研究においては、調査対象者のなかでADLが自立した者が非常に多いことが考えられたため、IADLを用いた。IADLは、細川らの拡大ADL尺度を構成するIADL項目群を用いて<sup>21,22)</sup>、食事の用意、預貯金の出し入れ、日用品の買い物、バスや電車の利用の4項目それぞれについて、「できる（1点）」、「できない（0点）」の2択で尋ねて単純加算し、4点満点を自立とする得点を作成した（Cronbachの $\alpha$ 係数=0.76）。

### (2) 心理的状況に関する変数

地域社会への態度、暮らし方への志向性を設定した。地域社会への態度は、金らが地域共生意識として用いた5項目のうち<sup>14)</sup>、自分の所有地や建物を持たない者が回答しにくいと思われる1項目を除いた4項目を使用した。この4項目は、田中らによる地域社会への態度の尺度に含まれている項目である<sup>23)</sup>。具体的には、「町内会や自治会の世話を依頼されたら引き受けてもよい」、「近所に独居老人がいたら日常生活の世話をしてあげたい」、「地域の人々と何かをすることで自分の生活の豊かさを求めたい」、「居住地域に誇りや愛着のようなものを感じる」の4項目で、「とてもそう思う（5点）」～「まったくそう思わない（1点）」の5択で尋ねて単純加算し、20点満点とする得点を作成した（ $\alpha$ 係数=0.67）。得点が高いほど、地域社会の成員としての自覚に基づいて、地域社会という全体的な集合の場を重視することを意味する<sup>23)</sup>。

暮らし方への志向性は、先行研究<sup>24,25)</sup>を参考に6項目を調査票に採用し、「とてもそう思う（4

点）」～「まったくそう思わない（1点）」の4択で尋ねた。この志向性の因子構造をみるために、探索的な因子分析（主因子法・バリマックス回転）を行った。その際、因子数の決定は1より大きい固有値の数、因子負荷量が0.4以上という基準を用いた<sup>26)</sup>。その結果、2つの因子が抽出され、それぞれ、「変化や新しさを伴う活動的な暮らし方志向（3項目、12点満点、 $\alpha$ 係数=0.60）」、「平穏でのんびりした暮らし方志向（3項目、12点満点、 $\alpha$ 係数=0.57）」と名づけた。

具体的な質問項目は、「変化や新しさを伴う活動的な暮らし方志向（以下、変化や新しさを伴う活動的志向とする）」が、「変化のある暮らしをしたい」、「新しいことをはじめたい」、「毎日精力的に活動するような人生を送りたい」の3項目で、得点が高いほど変化や新しさを求め、精力的に活動するような暮らし方を志向していることを示す。「平穏でのんびりした暮らし方志向（以下、平穏でのんびり志向とする）」は、「平穏な生活をしたい」、「つらいことはすべて避けたい」、「静かでのんびりした生活をしたい」の3項目で、得点が高いほど平穏で静かな暮らし方を志向していることを示す。なお、平穏でのんびり志向の $\alpha$ 係数は0.57と高くなかったが、因子分析でこれらの2因子が確認できたこと、項目数が3項目と少ないことが影響したと思われることから、ある程度の信頼性を有し、分析に使用しても大きな問題はないと判断した。

### (3) 社会・環境的状況に関する変数

社会関係に関して、親しい友人や仲間の数、外出や活動参加への誘いという2変数を設定した。親しい友人や仲間の数は、「特にない（0点）」、「1~2人（1点）」、「3~4人（3点）」、「5~6人（5点）」、「7人以上（7点）」の5択で尋ねた。外出や活動参加への誘いは、外出や活動参加に誘われることがあるかどうかを尋ねた。

活動情報については、活動情報の認知、活動情報を教えてくれる人という2変数を設定した。活動情報の認知は、「趣味や娯楽の催し物」、「学習活動」、「ボランティア活動への参加の機会」という3項目とし、それぞれの情報を同世代の人よりも知っていると思うかを「とてもそう思う（4点）」～「まったくそう思わない（1点）」の4択で尋ねて単純加算し、12点満点とする得点とした（ $\alpha$

係数=0.85)。活動情報を教えてくれる人は、そのような情報を教えてくれる人がいるかどうかを尋ねた。

公共交通利用環境として、電車やバス利用時の不自由さという変数を設定した、この変数は、駅やバス停へのアクセスや乗り降りの際の身体的な負担、利用方法等の不自由さを総合的に判断してもらった主観的な指標とした。電車やバスの利用に関して、どちらか一方あるいは双方に「(かなり・少し)不自由さを感じる」と回答した者に「不自由さあり(1点)」、それ以外の者に「不自由さなし(0点)」を付与した。

技術や知識等については、松岡の研究と同様に、地域で活動する際に活用できる技術・知識・資格の有無<sup>8)</sup>、経験は、40~50歳代時の地域とのかかわり(以下、中年期の地域とのかかわりとする)の有無を尋ねた。

以上の従属変数および独立変数の妥当性について、研究者5人と各変数の測定項目および質問文の妥当性を検討し、必要に応じて修正を行ったため、内容妥当性(content validity)があると考えた。

### 3. 分析方法

有効回収数771人のうち、①代理回答ではないこと、②IADLの得点が1点以上であることという2つの条件を満たす者のみを抽出したため、本研究の分析対象者は654人となった(表1)。上記の②の条件を設定した理由は、日常生活動作能力が低い者を社会活動に焦点をあてた分析に用いることはふさわしいとはいえないと判断したためであった。

分析は、まず、社会活動の4側面と性、年齢二区分(65~74歳、75~84歳)との関係をみるために、t検定またはFisherの直接確率検定を用いた分析を行った。

つぎに、他の変数の影響を取り除いたうえで社会活動に関連する要因を明らかにするために、2値変数である仕事の側面以外の社会活動3側面も2値変数に再コーディングし、これら4側面それぞれに従属変数とするロジスティック回帰分析を行った。2値変数にした理由は、社会活動3側面の得点の分布が、0点の者、あるいは、高得点の者の割合が多く、正規分布から外れていたこと、仕事の側面は2値変数であるため、社会活動4側

表1 分析対象者の基本属性 (n=654)

	人(%)
年齢	
65-69歳	237(36.2)
70-74歳	205(31.3)
75-79歳	142(21.7)
80-84歳	70(10.7)
平均値±SD	72.2±5.0
性別	
男性	312(47.7)
女性	342(52.3)
家族形態	
独居	159(24.4)
夫婦のみ	235(36.1)
その他	257(39.5)
配偶者の有無	
あり	421(65.7)
なし	220(34.3)
学歴	
中学校卒業	262(40.6)
高等学校卒業	281(43.6)
短大・大学等卒業	102(15.8)
暮らし向き	
大変ゆとりあり	27(4.1)
ややゆとりあり	93(14.3)
ふつう	348(53.5)
やや苦しい	133(20.4)
大変苦しい	50(7.7)
居住年数	
20年以上	493(75.8)
15-20年未満	42(6.5)
10-15年未満	40(6.2)
5-10年未満	27(4.2)
5年未満	48(7.4)

注1: 各項目で欠損値がある者は除外しているため n=654とまらない場合がある。

面それぞれについて統一した分析方法を用いたほうがその結果をよりわかりやすいかたちで提示できること、という点を検討したためであった。再コーディングについて、社会参加・奉仕活動と学習活動は、0点の者の割合がそれぞれ27.7%、63.8%と多かったため、それぞれ「0点の者」=0、「1点以上の者」=1とし、個人活動は、10点満点のうち9点の者の割合が27.0%、8点の者が20.0%と高得点の者の割合が多かったため、「0~

7点の者]=0, 「8~10点の者]=1とした。独立変数は、先に、関連が予想される要因として設定した変数がふさわしいものであるかをみるために、社会活動4側面との関係を Spearman の順位相関係数または Fisher の直接確率検定を用いて分析し、社会活動のいずれかの側面に統計学的に有意な関連がみられた変数をすべて用いる強制投入法とした。基本属性は6変数を投入した。家族に関する変数は、配偶者の有無と家族形態の間に比較的強い相関がみられたため (Spearman の順位相関係数 = .551,  $P < .001$ ), 配偶者の有無を用いた。学歴は、中学校卒業を基準とした2つのダミー変数, 暮らし向きは、苦しい者 (大変・やや苦しい) を基準とした2つのダミー変数を使用した。居住年数は、20年未満を基準としたダミー変数とした。ただし、仕事の側面の分析では、仕事により収入を得て、暮らし向きにゆとりが生まれるという因果関係の解釈が一般的といえるため、暮らし向きは投入しないこととした。

### III 研究結果

#### 1. 社会活動および関連が予想される変数の性・年齢二区分別の分布

社会活動4側面の性・年齢二区分別の分布について、個人活動、および、社会参加・奉仕活動の

平均値は、男性と比較して女性のほうが高く、年齢二区分の比較においては有意な差はみられなかった。学習活動は、性および年齢二区分の比較においていずれも有意な差はみられなかった。仕事は、女性と比較して男性のほうが、また、75~84歳と比較して65~74歳のほうがしている者の割合が高くなっていた (表2)。

関連が予想される要因として設定した変数の性・年齢二区分別の分布は、表3に示したとおりである。

#### 2. 社会活動に関連する要因

社会活動3側面を再コーディングした後の分布は、表4に示した。

関連が予想される要因として設定した変数それぞれは、社会活動4側面のうち少なくとも3側面以上に統計学的に有意な関連を示した (表5)。この結果を受けて、以下に示すロジスティック回帰分析を行う際には、これらの変数をすべて独立変数に強制投入した。

ロジスティック回帰分析を行った結果、個人活動の関連要因は、学歴 (短大・大学等卒業)、暮らし向き (ゆとりあり)、外出時のからだのつらさ、親しい友人や仲間の数、活動情報の認知、活動情報を教えてくれる人であった。社会参加・奉仕活動においては、居住年数、地域社会への態

表2 社会活動4側面の性・年齢二区分別の分布

平均値±SD または人 (%)

社会活動 (得点の範囲)	性		検定	年齢二区分		検定	全体 (n=654)
	男性 (n=312)	女性 (n=342)		65-74歳 (n=442)	75-84歳 (n=212)		
個人活動 <sup>a)</sup> (0-10点)	6.9±2.3	7.4±2.0	*	7.3±2.1	6.9±2.2	n.s.	7.1±2.2
社会参加・奉仕活動 <sup>a)</sup> (0-6点)	1.7±1.7	2.1±1.8	*	1.9±1.7	2.0±1.9	n.s.	1.9±1.8
学習活動 <sup>a)</sup> (0-4点)	0.5±0.8	0.6±0.9	n.s.	0.5±0.8	0.6±1.0	n.s.	0.6±0.9
仕事 <sup>b)</sup>							
あり	131(43.1)	70(21.4)	***	168(39.2)	33(16.3)	***	201(31.9)
なし	173(56.9)	257(78.6)		261(60.8)	169(83.7)		430(68.1)

注1: 社会活動の各側面で欠損値がある者は除外しているため n の合計数に満たない場合がある。

注2: <sup>a)</sup>は t 検定, <sup>b)</sup>は Fisher の直接確率検定の分析を行った。

注3: 仕事ありと回答した者の職業形態は、割合が高い順に、「自営業」が52.2%, 「自家営業の手伝い」が12.9%であった。

\*\*\*  $P < .001$ , \*\*  $P < .01$ , \*  $P < .05$ , n.s. 有意差なし

表3 関連が予想される変数の性・年齢二区分別の分布

平均値±SD または人(%)

	性		年齢二区分		全体 (n=654)
	男性 (n=312)	女性 (n=342)	65-74歳 (n=442)	75-84歳 (n=212)	
[身体的状況]					
IADL					
平均値±SD	3.7±0.6	3.8±0.6	3.8±0.5	3.6±0.8	3.7±0.6
外出時のからだのつらさ					
あり	90(29.8)	142(42.1)	117(27.0)	115(55.8)	232(36.3)
なし	212(70.2)	195(57.9)	316(73.0)	91(44.2)	407(63.7)
[心理的状況]					
地域社会への態度					
平均値±SD	13.1±2.8	13.4±2.8	13.3±2.8	13.0±2.8	13.2±2.8
4-11点	80(26.7)	79(24.2)	110(25.6)	49(25.0)	159(25.4)
12-14点	124(41.3)	127(39.0)	162(37.7)	89(45.4)	251(40.1)
15-20点	96(32.0)	120(36.8)	158(36.7)	58(29.6)	216(34.5)
変化や新しさを伴う活動的志向					
平均値±SD	7.4±1.6	7.5±1.8	7.6±1.7	7.1±1.5	7.5±1.7
3-6点	93(30.5)	98(29.5)	116(26.7)	75(36.9)	191(30.0)
7-8点	141(46.2)	131(39.5)	184(42.4)	88(43.3)	272(42.7)
9-12点	71(23.3)	103(31.0)	134(30.9)	40(19.7)	174(27.3)
平穩でのんびり志向					
平均値±SD	8.8±1.4	8.9±1.6	8.8±1.5	9.0±1.5	8.9±1.5
3-7点	44(14.5)	54(16.5)	70(16.2)	28(13.9)	98(15.5)
8-9点	179(58.9)	162(49.4)	238(55.2)	103(51.2)	341(54.0)
10-12点	81(26.6)	112(34.1)	123(28.5)	70(34.8)	193(30.5)
[社会・環境的状況]					
親しい友人や仲間の数					
7人以上	77(25.4)	86(25.7)	116(26.8)	47(22.9)	163(25.5)
5-6人	50(16.5)	62(18.5)	77(17.8)	35(17.1)	112(17.6)
3-4人	79(26.1)	104(31.0)	118(27.3)	65(31.7)	183(28.7)
1-2人	49(16.2)	54(16.1)	68(15.7)	35(17.1)	103(16.1)
いない	48(15.8)	29(8.7)	54(12.5)	23(11.2)	77(12.1)
外出や活動参加への誘い					
あり	122(39.6)	206(60.9)	218(50.0)	110(52.4)	328(50.8)
なし	186(60.4)	132(39.1)	218(50.0)	100(47.6)	318(49.2)
活動情報の認知					
平均値±SD	6.4±1.7	6.6±1.9	6.5±1.7	6.5±2.0	6.5±1.8
3-5点	53(17.8)	72(22.1)	75(17.7)	50(25.0)	125(20.1)
6-7点	178(59.9)	157(48.2)	239(56.5)	96(48.0)	335(53.8)
8-12点	66(22.2)	97(29.8)	109(25.8)	54(27.0)	163(26.2)
活動情報を教えてくれる人					
いる	172(57.1)	243(73.4)	283(65.7)	132(65.7)	415(65.7)
いない	129(42.9)	88(26.6)	148(34.3)	69(34.3)	217(34.3)
電車・バス利用時の不自由さ					
あり	71(22.8)	99(28.9)	94(21.3)	76(35.8)	170(26.0)
なし	241(77.2)	243(71.1)	348(78.7)	136(64.2)	484(74.0)
技術・知識・資格					
あり	49(16.0)	44(13.1)	64(14.6)	29(14.0)	93(14.4)
なし	258(84.0)	293(86.9)	373(85.4)	178(86.0)	551(85.6)
中年期の地域とのかかわり					
あり	200(65.1)	232(70.1)	280(65.1)	152(73.1)	432(67.7)
なし	107(34.9)	99(29.9)	150(34.9)	56(26.9)	206(32.3)

注1：各項目で欠損値がある者は除外しているためnの合計数に満たない場合がある。

表4 社会活動3側面の再コーディング後の分布

	人 (%)
個人活動 (n=575)	
0-7点の者	265 (46.1)
8-10点の者	310 (53.9)
社会参加・奉仕活動 (n=603)	
0点の者	167 (27.7)
1-6点の者	436 (72.3)
学習活動 (n=611)	
0点の者	390 (63.8)
1-4点の者	221 (36.2)

度、平穩でのんびり志向、親しい友人や仲間の数、外出や活動参加への誘い、技術・知識・資格、中年期の地域とのかかわりであった。学習活動においては、地域社会への態度、外出や活動参加への誘い、活動情報の認知であった。仕事においては、年齢、性別、変化や新しさを伴う活動的志向、技術・知識・資格、中年期の地域とのかかわりであった(表6)。

#### IV 考 察

ロジスティック回帰分析の結果について、社会

表5 社会活動4側面と関連が予想される要因の2変数の関係

	個人活動 (n=575)	社会参加・奉仕活動 (n=603)	学習活動 (n=611)	仕事 (n=631)
[身体的状況]				
IADL <sup>a)</sup>	0.170 ***	0.105 *	0.091 *	0.015 n.s.
外出時のからだのつらさ <sup>b)</sup>				
あり	78 (38.2) ***	142 (67.9) n.s.	63 (29.7) *	44 (19.7) ***
なし	226 (63.1)	286 (74.7)	153 (39.6)	154 (39.0)
[心理的状況]				
地域社会への態度 <sup>a)</sup>	0.231 ***	0.287 ***	0.323 ***	0.081 *
変化や新しさを伴う活動的志向 <sup>a)</sup>	0.149 ***	0.094 *	0.188 ***	0.148 ***
平穩でのんびり志向 <sup>a)</sup>	-0.140 **	-0.019 n.s.	-0.090 *	-0.117 **
[社会・環境的状況]				
親しい友人や仲間の数 <sup>a)</sup>	0.416 ***	0.382 ***	0.323 ***	0.163 ***
外出や活動参加への誘い <sup>b)</sup>				
あり	201 (70.3) ***	257 (88.6) ***	165 (55.6) ***	102 (32.4) n.s.
なし	108 (37.9)	176 (57.3)	55 (17.9)	98 (31.6)
活動情報の認知 <sup>a)</sup>	0.306 ***	0.279 ***	0.368 ***	0.059 n.s.
活動情報を教えてくれる人 <sup>b)</sup>				
あり	243 (67.1) ***	312 (82.3) ***	175 (45.5) ***	141 (35.2) *
なし	59 (30.3)	113 (54.1)	39 (18.8)	57 (27.1)
電車・バス利用時の不自由さ <sup>b)</sup>				
あり	64 (43.0) **	98 (64.1) *	47 (29.6) *	29 (17.9) ***
なし	246 (57.7)	338 (75.1)	174 (38.5)	172 (36.7)
技術・知識・資格 <sup>b)</sup>				
あり	61 (71.8) ***	81 (91.0) ***	51 (57.3) ***	44 (50.0) ***
なし	246 (50.8)	351 (69.1)	168 (32.6)	155 (29.0)
中年期の地域とのかかわり <sup>b)</sup>				
あり	233 (61.8) ***	319 (81.2) ***	171 (42.4) ***	151 (36.3) ***
なし	71 (38.2)	106 (54.4)	45 (23.1)	45 (22.4)

注1: 各項目で欠損値がある者は除外しているためnの合計数に満たない場合がある。

注2: 社会活動の仕事以外の3側面は表4に示したように再コーディングを行った変数を使用した。

注3: <sup>a)</sup>は Spearman の順位相関係数, <sup>b)</sup>は Fisher の直接確率検定の分析を行った。<sup>b)</sup>の表の数値は社会活動各側面の高得点群の人数(%)であり, (%)は関連が予想される変数の各カテゴリーを100%とした割合である。

\*\*\*  $P < .001$ , \*\*  $P < .01$ , \*  $P < .05$ , n.s. 有意差なし

表6 社会活動4側面に関連する要因(ロジスティック回帰分析結果)

	個人活動	社会参加・奉仕活動	学習活動	仕事
	オッズ比(95%CI)	オッズ比(95%CI)	オッズ比(95%CI)	オッズ比(95%CI)
〔基本属性〕				
年齢	0.97(0.93-1.02)	1.03(0.97-1.08)	1.02(0.97-1.07)	0.91(0.86-0.95)***
性別(基準:女性)	0.66(0.40-1.08)	0.80(0.47-1.36)	1.26(0.77-2.07)	2.64(1.67-4.19)***
配偶者の有無(基準:なし)	1.09(0.65-1.83)	1.19(0.69-2.08)	0.88(0.53-1.46)	1.41(0.86-2.32)
学歴(基準:中学校卒業)				
高等学校卒業	1.40(0.87-2.25)	0.98(0.58-1.63)	0.77(0.48-1.25)	0.96(0.61-1.52)
短大・大学等卒業	2.05(1.06-3.97)*	2.10(0.96-4.59)	1.36(0.73-2.54)	1.17(0.65-2.13)
暮らし向き(基準:大変・やや苦しい)				
ふつう	1.31(0.78-2.21)	0.93(0.53-1.64)	1.27(0.74-2.20)	—
大変・ややゆとりあり	2.45(1.22-4.94)*	0.64(0.30-1.38)	1.36(0.70-2.64)	—
居住年数(基準:20年未満)	1.05(0.62-1.78)	1.91(1.13-3.25)*	1.04(0.61-1.79)	1.34(1.81-2.19)
〔身体的状況〕				
IADL	1.55(1.00-2.39)	1.38(0.92-2.06)	1.46(0.93-2.29)	1.07(0.73-1.59)
外出時のからだのつらさ (基準:なし)	0.55(0.33-0.92)*	0.78(0.43-1.44)	0.85(0.50-1.44)	0.94(0.56-1.58)
〔心理的状況〕				
地域社会への態度 変化や新しさを伴う活動 的志向	1.06(0.97-1.16)	1.23(1.11-1.36)***	1.16(1.06-1.27)**	0.97(0.89-1.05)
平穩でのんびり志向	0.94(0.81-1.10)	0.87(0.74-1.01)	1.09(0.94-1.26)	1.22(1.06-1.39)**
	0.94(0.80-1.10)	1.21(1.02-1.43)*	0.95(0.81-1.11)	0.95(0.82-1.08)
〔社会・環境的状況〕				
親しい友人や仲間の数	1.24(1.12-1.38)**	1.27(1.12-1.43)**	1.09(0.98-1.21)	1.07(0.97-1.19)
外出や活動参加への誘い (基準:なし)	1.52(0.92-2.50)	2.33(1.34-4.05)**	3.06(1.87-5.00)***	0.81(0.50-1.32)
活動情報の認知	1.23(1.06-1.43)**	1.16(0.99-1.35)	1.27(1.10-1.48)**	0.96(0.84-1.10)
活動情報を教えてくれる 人(基準:なし)	1.88(1.11-3.16)*	1.16(0.66-2.04)	1.32(0.76-2.28)	1.23(0.73-2.07)
電車・バス利用時の不自 由さ(基準:なし)	0.94(0.54-1.64)	0.87(0.48-1.60)	0.82(0.47-1.44)	0.60(0.34-1.05)
技術・知識・資格 (基準:なし)	1.21(0.63-2.34)	2.61(1.10-6.24)*	1.16(0.64-2.11)	1.90(1.07-3.35)*
中年期の地域とのかかわ り(基準:なし)	1.51(0.94-2.42)	2.64(1.62-4.31)***	1.54(0.94-2.50)	2.27(1.41-3.64)**
モデル $\chi^2$ (df)	179.75(20)***	177.79(20)***	164.67(20)***	115.68(18)***

\*\*\*  $P < .001$ , \*\*  $P < .01$ , \*  $P < .05$ 

CI: 信頼区間

活動の側面ごとにみていくことにする。

まず、個人活動が活発な者の特性であるが、外出時にからだのつらさを感じていないという結果について、指標は異なるが、個人活動と体力自己評価や健康度自己評価との正の関連<sup>13,14)</sup>、外出頻度の高さと転倒不安による外出制限がないこととの関連が報告されており<sup>27)</sup>、個人活動や外出頻度には、このような外出に関係する主観的な指標の

重要性が示されている。親しい友人や仲間の数が多いことについて、個人活動には友人や隣人といった他者との交流を示す項目が半数以上含まれていることから、友人や仲間の数が多いことが活動の活発さに結びついていたといえる。活動情報の把握状況の程度が良好なことについて、社会活動しやすい環境整備のためには活動情報の伝達の重要性が指摘されており<sup>28,29)</sup>、これをすすめること

により、個人活動が活発になる可能性が示された。活動情報を教えてくれる人がいることについて、情報獲得の経路が豊富であれば、関心のある活動の情報を得る機会が多くなり活動に結びつきやすくなるため、妥当な結果といえよう。

つぎに、社会参加・奉仕活動が活発な者の特性であるが、地域社会への態度の得点が高いという結果は、金らの知見<sup>14)</sup>と一致した。これが強い関連要因 ( $P < .001$ ) の1つであったことは、この活動内容がコミュニティとのかかわりが強い項目で構成されていたためであろう。平穏でのんびり志向が強いことについて、この活動の構成項目の半数は、地域行事、町内会や自治会等、居住地域により密着したもの、かつ伝統的なものである。平穏でのんびり志向が強い者は、このような社会活動を選択する傾向にあると推察される。高齢期の生活の志向性と社会活動の関係を検討した研究は少ないため<sup>30)</sup>、今後詳しく検討していく必要がある。親しい友人や仲間の数が多いことについて、高齢者の社会参加を組織だった集団での活動と捉えて研究した松岡の知見<sup>8)</sup>と一致した。この活動は、主に他者との交流が活発な集団的な活動の項目から成っているため、友人や仲間の数が多い者は活動的になっていたといえる。外出や活動参加への誘いがあることについて、高齢者の日常生活は他者との相互作用によって大きく影響されること<sup>31,32)</sup>、この活動は主に集団的な活動の項目から構成されているため、その集まりに参加している友人や仲間に誘われたり、その集まりや地域の世話役的な役割を持った者から参加を促されたりすることが考えられ、活動参加に結びつきやすい要因となったと思われる。活動することをためらっていたり自分ひとりだけで参加することを嫌がったりする者も、何らかの誘いがあれば活動的になる可能性が示唆された。技術・知識・資格があることについて、内閣府が平成15年に実施した「高齢者の地域社会への参加に関する意識調査」のなかで、本研究の社会参加・奉仕活動にほぼ該当する活動について、活動を行う必要条件、参加したい理由、参加しなかった理由、参加して良かったことを尋ねている。これらに対する複数回答の内訳をみると、それぞれに「自らの技術や経験」が含まれており、活動参加の要因の1つであることがわかる。活動に参加して技術・知識・資格を

活用したり、他者や団体等から活動にそれを活かすよう依頼されたりして、活動参加に結びつく者もいると思われる。中年期に地域とのかかわりを持っていたことについて、そのような者は、なじみのある活動の場があったり、地域での友人・知人との交流や活動経験が豊富であったり、高齢期の活動参加につながりやすい豊富な活動資源を保有しているため、退職後に地域の活動に入っていくやすいこと、高齢期以前からの活動を継続している者もいると推測されることから、関連がみられた可能性が考えられる。

そして、学習活動が活発な者の特性であるが、地域社会への態度の得点が高いという結果は、金らの知見<sup>14)</sup>と一致した。学習活動は、社会参加・奉仕活動と同様、地域の人間関係を基盤として成立している側面があるため<sup>14)</sup>、関連があったのであろう。外出や活動参加への誘いがあることについて、内閣府の調査によると、高齢者が学習・社会活動に参加したきっかけは、「友人・仲間のすすめ」という回答の割合が最も多く、「自治会・町内会の呼びかけ」や「活動団体の呼びかけ」という回答もみられる<sup>33)</sup>。このことから、学習活動は、他者からの外出や活動への誘いが参加に結びつきやすいものと推測される。活動情報の把握状況の程度が良好なことについて、学習活動は、開催の場所、日時や時期が多様なため、活動情報の認知の程度が高くないと活動参加に結びつきにくいことが指摘されており<sup>29)</sup>、本研究はこの指摘を支持する結果となった。

最後に、仕事をしている者の特性であるが、変化や新しさを伴う活動的志向が高いことについて、玉腰らによると、65歳以上のうち仕事をしていない者の割合は71.0%<sup>16)</sup>、本研究では68.1%となっており、調査対象地域により多少の差はあると思われるが、このような調査に回答した高齢者のうち7割程度の者は就業していない。就業している3割程度の者は、変化や新しさを求め、精神的に活動するような暮らし方を志向するという特性があるのであろう。技術・知識・資格があることについて、彼らはそれを活用して高齢期に仕事を継続していること、再就職しやすいこと、仕事の依頼があることが考えられる。中年期に地域とのかかわりを持っていたことについて、仕事をしている者のうち、自営業と回答した者が52.2%と

半数以上を占めていた。彼らは、以前から地域で自営業を継続してきたことが地域とのかかわりを持つことにつながっていたことが考えられ、それが研究結果に寄与した可能性が推測される。

高齢者の社会活動の関連要因を多変量解析により検討した研究は極めて少ないため、本研究と先行研究との単純な比較は困難であり、大都市居住高齢者の特徴を農村部等と比較して明言できない。ここでは、大都市は農村部と比較して地域住民のつながりが希薄なことを考慮し、以下に2点示す。第1に、個人活動、社会参加・奉仕活動、学習活動が活発な者は、親しい友人や仲間の数や外出や活動参加への誘いといった社会関係が豊かであった。大都市地域では住民同士のつながりが希薄であるため、居住地域に友人や顔なじみの者をほとんど持たない者は、社会活動の程度が大きく低下する可能性がある。したがって、地域における仲間づくりや共通の関心を持つ者同士が出会い共に活動しやすいような支援と同時に、地域で活発に活動している者や世話役的な存在の高齢者等が適度な誘いをかけて活動に結びつけていけるように、地域のキーパーソンを育てていくことも求められよう。第2に、社会参加・奉仕活動は、高齢期以前の地域とのかかわりの有無が関連していた。高齢期になってからどのように活動していけばよいのか戸惑わないように、地域とのつながりを持てるような活動に多くの者が参加できるコミュニティづくりと同時に、個人の側も高齢期以前から地域の活動に参加したり把握したりしておくといった努力が求められる。大都市では、仕事一筋で過ごしてきたために居住地域とのかかわりがなかった会社勤めをしてきた者も少なくないことが考えられる。彼らが退職後の高齢期にあまり躊躇せずに活動に参加しやすいような支援体制も整えていく必要がある。

最後に、本研究は1つの特定地域の高齢者を調査対象としたため、その地域特性が結果に影響を与えた可能性がある。本結果が他の大都市の高齢者にどの程度合致するのか、追試により確認していく必要がある。

(受付 2005. 7. 1)  
(採用 2006. 6.19)

## 文 献

- 1) 中村好一, 金子 勇, 河村優子, 他. 在宅高齢者の主観的健康感と関連する因子. 日本公衆衛生雑誌 2002; 49: 409-416.
- 2) 松田晋哉, 筒井由香, 高島洋子. 地域高齢者のいきがい形成に関連する要因の重要度の分析. 日本公衆衛生雑誌 1998; 45: 704-712.
- 3) Larson R. Thirty years of research on the subjective well-being of older Americans. *Journal of Gerontology* 1978; 33: 109-125.
- 4) Rowe JW, Kahn RL. Successful aging. *The Gerontologist* 1997; 37: 433-440.
- 5) Kincade JE, Rabiner DJ, Bernard SL, et al. Older adults as a community resource: results from the national survey of self-care and aging. *The gerontologist* 1996; 36: 474-482.
- 6) 厚生労働省. 厚生労働白書(平成15年版). 東京: ぎょうせい, 2003; 164-184.
- 7) 佐藤秀紀, 友田美香. 地域在宅高齢者の余暇活動に関連する要因の検討. *日本の地域福祉* 1997; 11: 21-35.
- 8) 松岡英子. 高齢者の社会参加とその関連要因. *老年社会科学* 1992; 14: 15-23.
- 9) Bukov A, Maas I, Lampert T. Social participation in very old age: cross-sectional and longitudinal findings from BASE. *Journal of Gerontology: PSYCHOLOGICAL SCIENCES*. 2002; 57B: P510-P517.
- 10) Choi LH. Factors affecting volunteerism among older adults. *Journal of Applied Gerontology* 2003; 22: 179-196.
- 11) 橋本修二, 青木利恵, 玉腰暁子, 他. 高齢者における社会活動状況の指標の開発. *日本公衆衛生雑誌*. 1997; 44: 760-768.
- 12) 佐藤秀紀, 鈴木幸雄, 松川敏道. 地域高齢者の社会活動への参加状況. *日本の地域福祉* 2000; 14: 81-89.
- 13) 佐藤秀紀, 佐藤秀一, 山下弘二, 他. 地域在宅高齢者の社会活動に関連する要因. *厚生の指標* 2001; 48: 12-21.
- 14) 金 貞任, 新開省二, 熊谷 修, 他. 地域中高年者の社会参加の現状とその関連要因—埼玉県鳩山町の調査から—.*日本公衆衛生雑誌* 2004; 51: 322-334.
- 15) 尾島俊之, 柴崎智美, 橋本修二, 他. いきいき社会活動チェック表の開発. *公衆衛生* 1998; 62: 894-899.
- 16) 玉腰暁子, 青木利恵, 大野良之, 他. 高齢者における社会活動の実態. *日本公衆衛生雑誌* 1995; 42: 888-896.

- 17) 宇良千秋. 高齢者の社会参加の促進・阻害要因. 老年精神医学雑誌 2003; 14: 884-888.
- 18) Peters-Davis ND, Burant CJ, Braunschweig HM. Factors Associated with volunteer behavior among community dwelling older persons. *Activities adaptation & aging* 26; 2001: 29-44.
- 19) 内閣府. 高齢社会白書(平成15年版). ぎょうせい, 東京: 2003; 44.
- 20) Lawton MP. Assessing the competence of older people. Kent DP, Kastenbaum R, Sherwood S, eds. *Research planning and Action for the Elderly: The Power and Potential of Social Science*. New York: Behavioral Publications, 1972; 122-143.
- 21) 細川 徹, 坪野吉孝, 辻 一郎, 他. 拡大ADL尺度による機能的状態の評価—(1) 地域高齢者—. *リハビリテーション医学* 1994; 31: 399-408.
- 22) 細川 徹, 佐直信彦, 中村隆一, 他. 拡大ADL尺度による機能的状態の評価—(2) 在宅脳卒中患者—. *リハビリテーション医学* 1994; 31: 475-481.
- 23) 田中国夫, 藤本忠明, 植村勝彦. 地域社会への態度の類型化について—その尺度構成と背景要因—. *心理学研究* 1978; 49: 36-43.
- 24) 佐藤真一, 長田由紀子, 矢富直美, 他. 中・高齢者における生活の志向性と満足度. *老年社会科学* 1989; 11: 116-133.
- 25) 児玉好信, 古谷野亘, 岡村清子, 他. 都市壮年における望ましい老後の生活像. *老年社会科学* 1995; 17: 66-73.
- 26) 古谷野亘, 長田久雄. 実証研究の手引き. 東京: ワールドプランニング, 1992.
- 27) 藤田幸司, 藤原佳典, 熊谷 修, 他. 地域在宅高齢者の外出頻度別にみた身体・心理・社会的特徴. *日本公衆衛生雑誌* 2004; 51: 168-180.
- 28) 高橋昌子. 高齢者による社会活動の現状と将来的展望—千葉市とガルベストン市での活動を通して—. *日本の地域福祉* 2000; 14: 90-100.
- 29) 岡本秀明. 在宅高齢女性の高齢期の活動における活動意向の充足状況に関連する要因—大阪市N区における生きがいつくり委員会の調査から—. *社会福祉学* 2004; 45: 91-99.
- 30) 後藤康彰, 金子 勇, 坂野達郎, 他. 高齢者の「日常生活活動における関心の志向性」尺度作成の試み. *日本公衆衛生雑誌* 2005; 52: 246-256.
- 31) 古谷野亘. 老年期の社会適応に影響を及ぼす社会的要因—社会関係を中心として—. *老年精神医学雑誌* 1998; 9: 372-377.
- 32) 矢部拓也, 西村昌記, 浅川達人, 他. 都市男性高齢者における社会関係の形成—「知り合ったきっかけ」と「その後の経過」—. *老年社会科学* 2002; 24: 319-326.
- 33) 内閣府. 高齢社会白書(平成16年版). ぎょうせい, 東京: 2004; 44-45.

# FACTORS ASSOCIATED WITH SOCIAL ACTIVITIES AMONG THE ELDERLY IN A METROPOLITAN AREA: PHYSICAL, PSYCHOLOGICAL, AND SOCIO-ENVIRONMENTAL PARAMETERS

Hideaki OKAMOTO\*, Shinichi OKADA<sup>2\*</sup>, and Masakazu SHIRASAWA<sup>2\*</sup>

**Key words** : elderly people in communities, metropolitan areas, social activities, social participation, cross-sectional studies

**Objective** The current study examined physical, psychological, and socio-environmental factors related to social activities among the elderly in a metropolitan area.

**Methods** Fifteen hundred individuals aged 65 to 84 years were randomly selected in Osaka City. Data for 771 persons (51.4%) were obtained from a mail survey and these for 654 eligible cases were analyzed for level of social activities from four aspects: personal activities, socially-related activities, learning activities, and job activity. In order to examine factors related to social activities, we used logistic regression analyses with each of the four aspects of social activities as dependent variables. Independent variables were socio-demographic, physical, psychological, and socio-environmental variables.

**Results** Multivariate analyses revealed the following results: no feeling of difficulty in going outdoors, number of friends, sense of collecting information about social activities, and informational social support were positively associated with personal activities.

The attitude toward community score, the motivation to live comfortably score, the number of friends, opportunities to be invited to participate, any skill or knowledge, and experience in community activities were positively related to participation in socially-related activities.

The attitude toward community score, opportunities to be invited to take part, and sense of collecting information about social activities were also positively associated with learning activities.

Furthermore, motivation to active life score, any skill or knowledge, and experience in community activities were positively related to job activity.

**Conclusion** Physical, psychological, and socio-environmental factors as well as socio-demographic factors were found to be associated with social activities among the elderly in a metropolitan area.

---

\* School of Home Economics, Wayo Women's University

<sup>2\*</sup> Graduate School of Human Life Science, Osaka City University